

森 貞

(福井工業高等専門学校)

要旨

V1に他動詞、V2にアスペクト動詞が来る複合動詞(V1+V2)のV2に「始まる」・「続く」は生起不可能であるとされている。しかし、インターネットを検索すると、V1が他動詞受動形の場合に、「始まる」・「続く」が後続する実例が散見される。また、言語感覚調査においても、「V1〈他動詞能動形〉+ {始まる / 続く}」よりも「V1〈他動詞受動形〉+ {始まる / 続く}」の方が、容認可能性(許容度)が高いという結果が得られている。上記の言語事実および言語感覚調査の結果を説明するために、以下の2点が主張される。①「V1〈他動詞能動形〉+ {始まる / 続ける}」はIモード認知(中村 2004, 2009)を反映した表現であり、「V1〈他動詞受動形〉+ {始まる / 続ける}」及び「V1〈他動詞受動形〉+ {始まる / 続く}」はDモード認知(中村 2004, 2009)を反映した表現である。②Dモード認知下においては、trajector付与先が、【被行為者】(patient)の場合には、V2に「始まる」・「続ける」が生起し、他方、trajector付与先が、(V1〈他動詞受動形〉が表す)【事態】(state)の場合には、その捉え方(construal)が「始まる」・「続く」の生起を要求する。

1. はじめに

複合動詞(V1+V2)のV2にアスペクト動詞が来る場合、以下に示すような制約があるとされている。

- (1) Only the transitive form of the inceptive and continuative aspect verbs may co-occur with a verbal complement regardless of the transitivity of the embedded verb ((115a) and (115b)).

(115) a. Akanbo-wa aruki -hajime/*hajimar -ta. b. Taro-wa hon-o yomi -tsuzuke/*tsuzuk -ta.

(Fukuda (2012: 1013-1014))

- (2) 3つ目は統語的複合動詞のV2に使われる語彙の特性である。例えば、(i)日本語複合動詞のV2には「始まる」が来ることがない(中略) (iii)「続く」は統語的複合動詞のV2としては使えない(後略)。

(木戸・團迫・一瀬 (2018: 135))

しかし、インターネット検索をすると、V1〈他動詞受身形〉に「始まる」・「続く」が後続する実例((3b)-(8b))が多数見つかる((3a)-(8a)は標準的な表現)。

- (3) a. さらににはガバナンス手法としての指標・ランキングの機能や位置づけが論じられ始めている。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16H03543/>

b. さらに改正された教育基本法の対応としても、法教育が取り上げられ、その推進が論じられ始まった。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18530684/>

- (4) a. 近年注目を浴びている大気圧非平衡プラズマは、これまでの産業への用途に加え、様々な臨床における新規治療技術としての可能性が期待されており、世界中で新規治療法への応用が研究され始めている。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PLANNED-24108008/>

b. 哲学対話や哲学カウンセリングという哲学実践が徐々に研究され始まっていた。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-25370010/>

- (5) a. すなわち、試料粒子の除去率 η が100%になる壁面動圧が、試料中の最小粒子径 D_{pmin} の粒子が全て除去された時の壁面動圧 P_{wmax} 、 η が0%から立ち上がり始める壁面動圧が最大粒子径 D_{pmax} を持つ粒子が除去され始めた時の壁面動圧 P_{wmin} となる。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-15K06542/>

b. 鉱物によってそれが含む結晶水の除去温度は異なるが、土型を例とすれば、肌焼き法では、鑄型面が700℃に達すれば結晶水が除去され始まる。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21650233/21650233seika.pdf>

(6) a. 記憶は動物が自然界で生存する上で必要不可欠な生命現象であり、脳における最も重要な機能の一つである。しかし、一度獲得した記憶がどのようにして脳で長期間維持され続けるのか、その分子機構の詳細はほとんど明らかになっていない。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H02528/>

b. 現在の冥王星はこの様な軌道安定化機構をどうして獲得したのか、安定化機構は長期間(太陽系年齢)にわたって維持され続けるのか、これらは今後の研究課題である。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-05836037/>

(7) a. 1940年代日中の身体芸術によるプロパガンダは、国共内戦、中華人民共和国および台湾の治政においても利用され続けた。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18H03568/>

b. あきらまかにかつての体育は国の期待、軍のねらい、国防への力として利用され続けました。

<https://www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-346/140331/file/83Sports.pdf>

(8) a. MCT オイルは、脂肪に働きかけ、ケトン体を産出することができ、アルツハイマー病で、脳の栄養としてグルコースが使えない状態に陥っても、ケトン体が供給され続けられれば、神経細胞はエネルギーを産出し続けて、その活性を保つことができる。

https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=TD15960818&elmid=Body&fname=td15960818_cover.pdf

b. 剥離ひび割れを介して、雨水等が RC 床版内に埋設された鉄筋に供給され続けられれば、鉄筋の腐食がさらに進行することになり、腐食ひび割れの拡大を誘発することになる。

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/73575/30813_Dissertation.pdf

したがって、本発表の目的は、『複合動詞(V1+V2)において、通常、V2 への生起が不可とされる「始まる」・「続く」を生起可能(容認可能)にする要因』を明らかにすることである。

2. 言語感覚調査

本研究の目的を達成するために、以下の要領で言語感覚調査を実施した。

(9) 被験者：福井工業高等専門学校 3年生(2クラス)・4年生(4クラス) 215名(18歳 74名、19歳 141名)

同上 教職員 52名(20歳代4名、30歳代14名、40歳代12名、50歳代14名、60歳代8名)

実施期間：学生—2024/04/23(火)～2024/04/27(金)、教職員—2024/05/01(水)～2024/05/09(木)

実施方法：Microsoft Forms

フォームの説明：本言語感覚調査は、日本言語学会第168回大会(2024年6月29日 於：国際基督教大学)におけるポスター発表の「主張内容」を検証ための基礎データとして使用するものであり、この目的以外に使用するものではありません。なお、メールアドレス等で個人が特定される心配はありません。上記の趣旨に賛同する場合には、下記の質問([1]～[8])に回答して下さい(強制ではありません)。

○自分自身の言語感覚に照らし合わせて、各文を読んだ際に、問題なく容認(許容)できる場合は **1 ○**

やや不自然だが容認(許容)できなくもない場合は **2 △** まったく容認(許容)できない場合は **3 ×**

にチェックをお願いします(考えすぎず、感覚的に答えて下さい)。

(10) [1] 1980年代から、言語学者たちは、言語感覚調査の重要性を論じ始めた。

(前者：学生データ、後者：教職員データ、以降同様)

○	△	×
171 (79.5%) / 48 (92.3%)	32 (14.9%) / 4 (7.7%)	12 (5.6%) / 0 (0%)

(11) [2] 1980年代から、言語学者たちは、言語感覚調査の重要性を論じ始めた。

○	△	×
4 (1.9%) / 0 (0%)	20 (9.3%) / 6 (11.5%)	191 (88.8%) / 46 (88.5%)

(12) [3] 1980年代から、言語学者たちの中では、言語感覚調査の重要性が論じられ始めた。

○	△	×
113 (52.6%) / 34 (65.4%)	66 (30.7%) / 13 (25.0%)	36 (16.7%) / 5 (9.6%)

(13) [4] 1980年代から、言語学者たちの中では、言語感覚調査の重要性が論じられ始めた。

○	△	×
7 (3.3%) / 0 (0%)	33 (15.3%) / 11 (21.2%)	175 (81.4%) / 41 (78.8%)

(14) [5] 明治維新以降、英語教育関係者たちは、どのアプローチが最も教育効果が高いかを論じ続けている。

○	△	×
178 (82.8%) / 48 (92.3%)	24 (11.2%) / 3 (5.8%)	13 (6.0%) / 1 (1.9%)

(15) [6] 明治維新以降、英語教育関係者たちは、どのアプローチが最も教育効果が高いかを論じている。

○	△	×
31 (14.4%) / 4 (7.7%)	40 (18.6%) / 5 (9.6%)	144 (67.0%) / 43 (82.7%)

(16) [7] 明治維新以降、英語教育関係者たちの中では、どのアプローチが最も教育効果が高いかが論じられ続けている。

○	△	×
114 (53.0%) / 33 (63.5%)	74 (34.4%) / 13 (25.0%)	27 (12.6%) / 6 (11.5%)

(17) [8] 明治維新以降、英語教育関係者たちの中では、どのアプローチが最も教育効果が高いかが論じられ続けている。

○	△	×
30 (13.9%) / 5 (9.6%)	61 (28.4%) / 9 (17.3%)	124 (56.7%) / 38 (73.1%)

[1] (=10) に比べて[3] (=12) の、そして、[5] (=14) に比べて[7] (=16) の○の割合が少ないのは、V1受動化よりもV2受動化(「V1 能動形+ {始められる / 続けられる}」)の方がより適切であると判断する被験者が多かったからであろうと推察できる。

[6] (=15) の○の割合が予想よりもかなり多い理由は、「V1+続く」(語彙的複合語)の表現が存在していることが影響しているように思われるが、現時点では判然とせず、さらなる研究が必要である(本稿では扱わない)。

(18) V2 が「続く」の複合動詞の場合のV1は非対格動詞のみであり、したがって、主語は自然現象に限られる。例えば、「雨が降り続く」「雷 / 音が鳴り続く」「風が吹き続いた」等である。これらはV1にくるものが限定的である点で語彙的複合動詞である。

(木戸・團迫・一瀬 (2018: 139))

(19)は、[2] (=11)と[4] (=13)を比べる状況(V2=「始まる」)で、容認可能性(許容度)に差異を感じている場合、(前者に比べて)後者により高い許容傾向を示す被験者(の数および割合)の方が多ことを示している。

(19) [2]-[4]間の相対的容認度(許容度)

[2] > [4]	[2] = [4]	[2] < [4]
8 (3.7%) / 0 (0%)	182 (84.7%) / 47 (90.4%)	25 (11.6%) / 5 (9.6%)

内訳：

[2]>[4] : [○>△] (1)+[○>✕] (0)+[△>✕] (7) / [○>△] (0)+[○>✕] (0)+[△>✕] (0)
 [2]=[4] : [○=○] (3)+[△=△] (11)+[✕=✕] (168) / [○=○] (0)+[△=△] (6)+[✕=✕] (41)
 [2]<[4] : [△<○] (2)+[✕<○] (2)+[✕<△] (21) / [△<○] (0)+[✕<○] (0)+[✕<△] (5)

(20)は、[6] (=15)と[8] (=17)を比べる状況 (V2=「続く」) で、容認可能性 (許容度) に差異を感じている場合、後者の方をより許容する被験者が前者の方をより許容する被験者よりも多いことを示している。「始まる」の場合に比べて、(特に学生データで) 差が大きくないのは、[6] (=15)を○と判断した被験者の数が予想よりもかなり多かったことに起因している。ただし、後者の方をより許容する被験者の割合は、学生データでは、「始まる」の場合の約1.8倍、教職員データでは、2.2倍であることに注目されたい。

(20) [6]-[8]間の相対的容認度 (許容度)

[6]>[8]	[6]=[8]	[6]<[8]
36 (16.7%) / 5 (9.6%)	133 (61.9%) / 36 (69.2%)	46 (21.4%) / 11 (21.2%)

内訳：

[6]>[8] : [○>△] (13)+[○>✕] (6)+[△>✕] (17) / [○>△] (1)+[○>✕] (2)+[△>✕] (2)
 [6]=[8] : [○=○] (12)+[△=△] (20)+[✕=✕] (101) / [○=○] (1)+[△=△] (1)+[✕=✕] (34)
 [6]<[8] : [△<○] (3)+[✕<○] (15)+[✕<△] (28) / [△<○] (2)+[✕<○] (2)+[✕<△] (7)

(19)(20)に示されている数字は、V1が他動詞受動形の場合に、「始まる」・「続く」の後続が容認 (許容) されやすいということを示唆している。

3. 認知言語学的分析

まず、注目すべきは、「V1 (他動詞受動形) + {始める/続ける}」の「始める」・「続ける」は、認知的には、「始まる」・「続く」と表現されるべきところ ((21)を参照のこと) を、(22)に示す理由によって、その生起が妨げられているという点である。

(21) (3) 太郎が [(太郎が) 本を読み] 始めた。

(4) [太郎が本を読み] 始めた。

柴谷(1978)によると、例文(3)の場合の「始める」は、「(本を読む) ことを始める」という意味の他動詞用法の「始める」であり、「始める」の主語は文主語の「太郎」である。それに対して例文(4)の「始める」は、「(太郎が本を読む) ことが始まる」という意味の自動詞用法の「始める」であり、その主語は、文主語の「太郎」ではなく、「太郎が本を読む」という文全体である。(中略) 動作の開始を表す (他動詞用法の) 「始める (A)」が受動化される場合には「始め(A)-られる」という形になり、事象の生起を表す (自動詞用法の) 「始める (B)」が受動化される場合には「られ-始める (B)」という形になる。 (西川 (1985: 40))

(22) A closer look at the matter reveals cases where morphological consideration are not reliable at all. Such cases may arise as a result of historical change. A member of a transitive/intransitive pair may become disused, and the surviving member may take over the function of the other. (Shibatani (1973: 69-70))

この流れから考えると、(V2 には「始める」・「続く」を使用するという) 《慣習》よりも (【事態の生起】・【事態の継続】の) 《認知》が優先した場合に、「始まる」・「続く」が生起可能 (容認可能) になると推察することができる。では、《認知》の優先を促進する要因とはどのようなものであろうか。

事態把握の仕方には、大別して、〈主観的把握/Iモード認知〉と〈客観的把握/Dモード認知〉(池上 2003, 2004 中村 2004, 2009) の2種類があり、日本語は前者寄りの言語であるとされている。図1はIモード認知を図示したものであり、外側の楕円は「認知の場」(domain of cognition)、CはConceptualizer (認知主体) を表わしている。また、①の両向きの二重線矢印は身体的インタラクション (e.g. 地球上のCと太陽との位置的インタラクション)、②の破線矢印は認知プロセス (e.g. 視覚や視線の移動)、③の四角は認知プロセスによって構築される

「認知像」(e.g. 太陽の上昇)を表わしている。一方、図2はDモード認知を図示したものであり、Cが「認知の場」から外置されることによって、①認知主体と対象との直接的なインタラクションは解消され、②認知プロセスはより客観的な視点を持つことになり、③Iモード認知では「認知像」として捉えられていた対象は認知主体から独立した(より)客観的な存在として捉えられることになる。

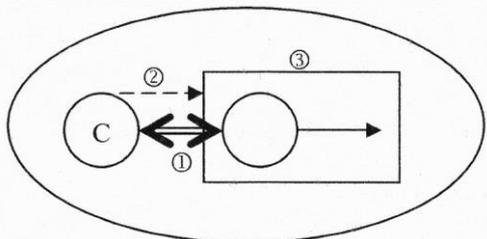


図1：Iモード認知(中村(2009:359))

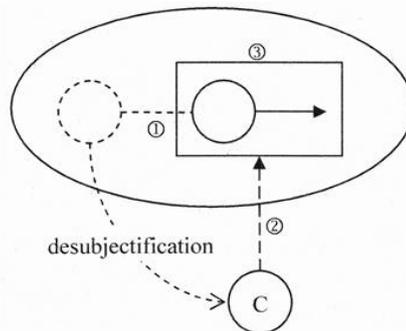


図2：Dモード認知(中村(2009:363))

上記の認知モードの違いを踏まえて、本稿では、「V1〈他動詞能動形〉+ {始める / 続ける}」はIモード認知を反映した表現であり、「V1〈他動詞受動形〉+ {始める / 続ける}」および「V1〈他動詞受動形〉+ {始まる / 続く}」はDモード認知を反映した表現であることを、そして、前者は、trajector 付与先が、【被行為者】(patient)である場合に、後者は、trajector 付与先が、V1〈他動詞受動形〉が表す【事態】(state)の場合に生起する表現であることを主張する。

益岡の一連の研究(1991, 2019)では、同じ受動文であっても、「受影受動文」(e.g. 雨に降られた。)は主観的な表現であり、他方、「降格受動文」(e.g. 大胆な仮説が(M氏 {によって / *?に}) 提案された)は客観的な表現であるとされている。

(23) 益岡隆志「主観性から見た日本語受動文の特質」(③所収)は日本語の受動文の分類を観察した上で、類型論的に現代日本語は「受影受動中心型の言語」であり英語の「中立受動中心型言語」と異なる可能性を示す。さらに、日本語受動文は「主観 vs. 客観」の対立を際立たせる方向へ変化、つまり客観性に向けても変化していると捉え、事態把握のスタンスの点で日本語は主観的把握を好むという一連の池上嘉彦の研究に対し、受動文の観点からは主観的把握と客観的把握の両面を見る必要があることを述べる。

③：澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』(ひつじ書房, 2019.4)

(天野(2020:31))

著者の感覚でも、一般に、能動文はCが「認知の場」にいる状況で描写される(Iモード認知)のに対して、受動文(特に「降格受動文」)はCが「認知の場」の外側から全体を俯瞰しなければ描写できないものである(Dモード認知)と考えており、「V1〈他動詞能動形〉+ {始める / 続ける}」及び「V1〈他動詞受動形〉+ {始める / 続ける}」の意味構造図は、それぞれ、図3・図4、図5・図6のように図示することができる。

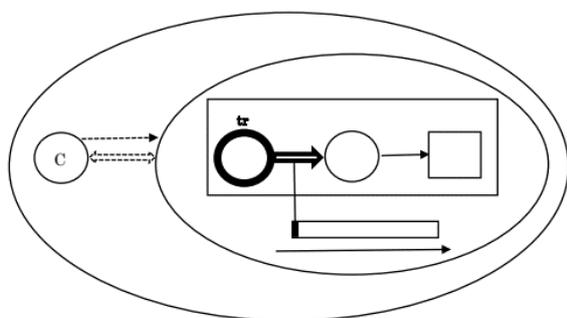


図3：「V1〈他動詞能動形〉+ 始める」

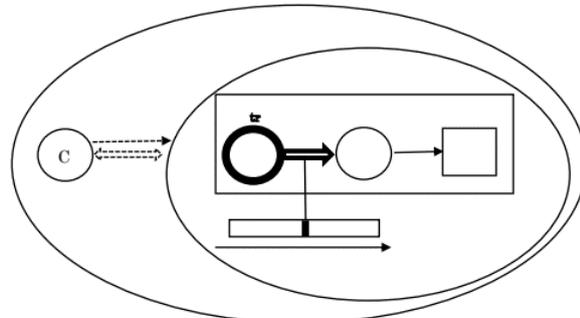


図4：「V1〈他動詞能動形〉+ 続ける」

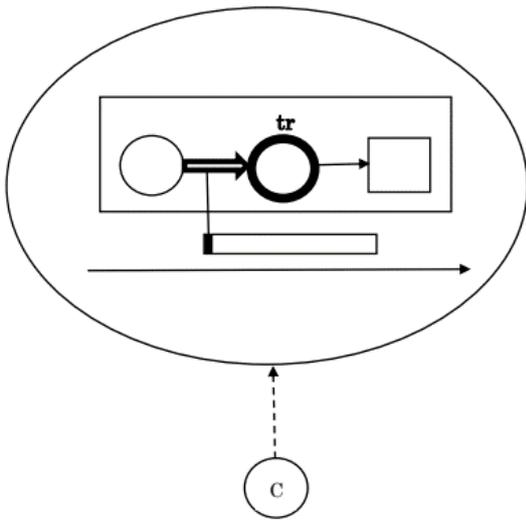


図5: 「V1 〈他動詞受動形〉 + 始める」

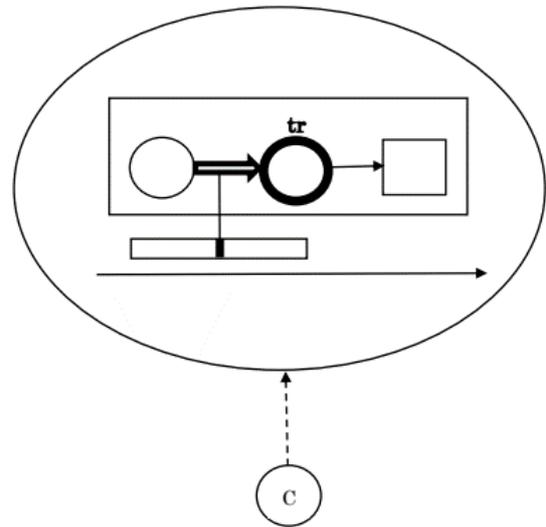


図6: 「V1 〈他動詞受動形〉 + 続ける」

なお、図3～図6における長い矢印(→)とその上方に近接する長方形(◻)は、この組み合わせで、アスペクトを表示している(図7を参照のこと)。

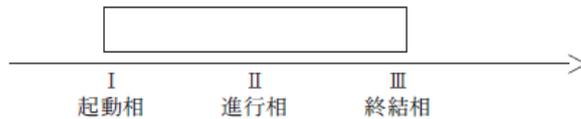


図7: アスペクト表示図(大里(2012: 31))

他方、図8・図9はそれぞれ、「V1 〈他動詞受動形〉 + 始まる」・「V1 〈他動詞受動形〉 + 続く」の意味構図であり、これらの図では、V1 〈他動詞受動形〉が表す【事態】(state)に trajector の役割が付与されており、この construal が、V2 における「始まる」・「続く」の生起を要求している。

- (24) a. 【事態】が 始まる 《認知レベル》 → 「V1 〈他動詞受動形〉 + 始まる」《表現レベル》
 b. 【事態】が 続く 《認知レベル》 → 「V1 〈他動詞受動形〉 + 続く」 《表現レベル》

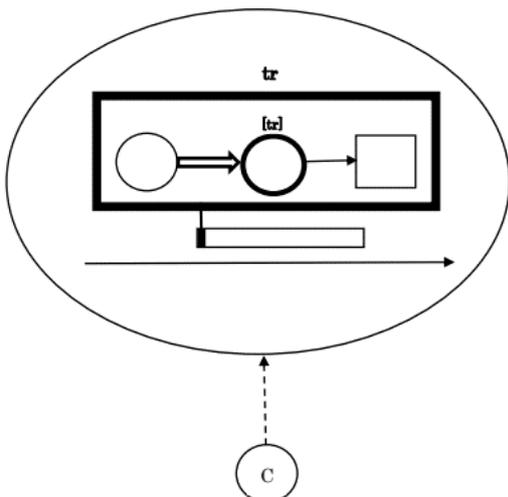


図8: 「V1 〈他動詞受動形〉 + 始まる」

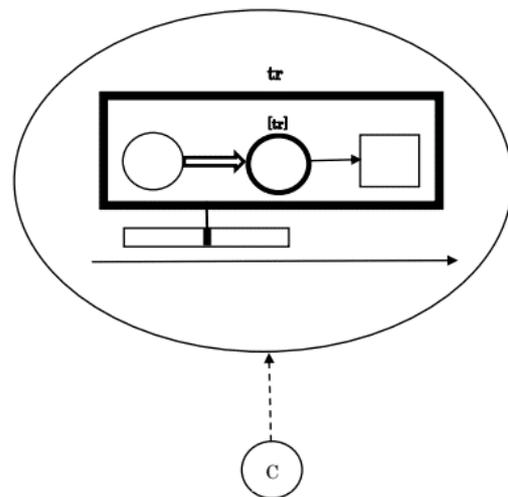


図9: 「V1 〈他動詞受動形〉 + 続く」

4. おわりに

V1 に他動詞、V2 にアスペクト動詞が来る複合動詞(V1+V2)のV2 に「始まる」・「続く」は生起不可能である

とされている。それに対して、インターネット検索において、V1 が他動詞受動形の場合に、「始まる」・「続く」が後続する実例が散見されること、また、言語感覚調査においても、「V1 (他動詞能動形) + {始まる / 続く}」よりも「V1 (他動詞受動形) + {始まる / 続く}」の方が、容認可能性 (許容度) が高いことを確認した。

本稿では、上記の項目を説明するために、認知言語学的手法を用いて、以下の2点を主張した。

- ① 「V1 (他動詞能動形) + {始める / 続ける}」はIモード認知 (中村 2004, 2009) を反映した表現であり、「V1 (他動詞受動形) + {始める / 続ける}」及び「V1 (他動詞受動形) + {始まる / 続く}」はDモード認知 (中村 2004, 2009) を反映した表現である。
- ② Dモード認知下においては、trajector 付与先が、【被行為者】(patient)の場合には、V2に「始める」・「続ける」が生起し、他方、trajector 付与先が、(V1 (他動詞受動形) が表す) 【事態】(state)の場合には、その捉え方 (construal) が、「始まる」・「続く」の生起を要求する。
但し、「V1 (他動詞能動形) + 続く」を許容する話者の認知プロセスの解明が不十分であることなど、解決すべき問題も多い。すべて今後の課題である。

主要参考文献

- 阿久澤弘陽 (2018) 『コントロール現象の統語的・意味的分析:主文動詞と補文形式の対応関係』筑波大学博士論文。
- 天野みどり (2020) 「文法 (理論・現代)」『日本語の研究』16 (2), 29-36.
- Fukuda, Shin. (2006) “The Syntax of Japanese Aspectual Verbs” A paper presented at the 3rd Workshop on Altaic in Formal Linguistics.
- Fukuda, Shin. (2012) “Aspectual Verbs as Functional Heads: Evidence from Japanese Aspectual Verbs” *Natural Language & Linguistic Theory* 30, 965-1026.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房。
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における主観性と主観性の指標(1)」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』3. ひつじ書房. 1-49.
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における主観性と主観性の指標(2)」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』4. ひつじ書房. 1-60.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。
- 木戸康人・團迫雅彦・一瀬陽子 (2018) 「日本語学習者の中間言語—韓国人日本語学習者による統語的複合動詞の習得の観点から—」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』9 (2), 117-141.
- 久野 暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店。
- 益岡隆志 (1991) 「受動表現と主観性」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版. 69-76.
- 益岡隆志 (2019) 「主観性から見た日本語受動文の特質」澤田治美・仁田義雄・山梨正明 (編) 『場面と主体性・主観性』ひつじ書房. 339-357.
- 宮腰幸一 (2020) 「日本語受動の種類論」『言語研究』157, 113-147.
- 森 貞(2022) 「日本語複合動詞の受動態形成について」*JCLA* 22 (日本認知言語学会論文集) CD-ROM 版. 65-77.
- 森 貞(2023) 「日本語複合動詞(V1+V2)において V1 受身形を可能にする認知的要因について—V2 が『尽くす』『直す』『返す』の場合—」『日本言語学会第 166 回大会予稿集』電子版. 185-191.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編) 『認知文法論 II』大修館書店. 3-51.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤朗他 (編) 『「内」と「外」の言語学』開拓社. 353-393.
- 新山聖也 (2021) 『現代日本語における統語的述語名詞の研究』筑波大学博士論文。
- Nishigauchi, Taisuke. (1993) “Long Distance Passive” in Nobuko Hasegawa (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. Kuroshio Publishers, 79-114.
- 西川真理子 (1995) 「『本が読み始められた』と『本が読まれ始めた』について」『大阪大学言語文化学』4, 39-48.
- 大野公裕 (2018) 「第 4 の統語的複合動詞「終わる」: 統語的複合動詞の分類再考」『メディア・コミュニケーション研究』71, 95-110.
- 大里泰弘 (2012) 「日英語アスペクトに関する一考察」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』10-1, 31-38.
- Shibanani, Masayoshi. (1973) “Where Morphology and Syntax Clash: A Case in Japanese Aspectual Verbs” 『言語研究』64, 65-96.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析: 生成文法の方法』大修館書店。